

支援者・被支援者間における関係の非対称性の解消と他者理解の検討

—俳句ワークショップを事例に—

帝京大学 李永淑

1. 目的

支援現場には、「弱者」の存在を前提とし、「弱者」より「強い」存在が何等かの援助を行うことによって支援が「成立」するという「常識」が依然強固に横たわるが、一方で、両者の非対称性が解消された事例も多く存在する。例えば災害支援における長期的な活動の継続は、支援者と被支援者の信頼関係を構築し、相互支援の関係に移行したりもする（渥美：2015、など）。しかし、そのような関係性の構築と実現のためには、強力なイニシアティブを握るキーパーソンが必要であったり、ヒト・モノ・カネ・時間などの問題などを乗り越えたりしなければならぬ。またそれは、支援が日常的ではなく「特別なこと」として捉えられ、「高尚な人」が行う領域という規範を強化する可能性につながる。根源的な問いに立ち戻ると、支援現場における関係性の非対称性と、その固着化を助長する構造を「負担なく」解消することは困難なのだろうか。以上の問題意識から、本発表では、限られた条件下での支援者・被支援者間における関係の非対称性の解消と他者理解、日常的な支援（非対称的な関係性に無自覚な状況下での支援）の実現の可能性を、俳句というツールを用いた実践例を通じて検討する。

2. 対象と方法

「支援」「被支援」の非対称的な関係性を構築しやすいと考えられる、年齢や身体的制限、職業などの社会的属性が異なる対象同士の他者理解における関係性の生成を、「俳句ワークショップ」という、短時間（単発）の条件下による実践例から検討する。そして「日常的な支援」という問いについては、ボランティアという補助線を引いて模索する。具体的には、①高齢者施設における「アートでキャッチボール」という大学生のボランティア活動（大学生×高齢者）、②俳人・花田春兆氏と開催したワークショップ（大学生×地域住民×障害者）、③大学における授業（教員×学生）、という、3つの実践例を用いる。

3. 結論

いずれの参加者たちも、俳句を贈り贈られた対象に対して、そして周囲のやり取りを目の当たりにし、結果として年齢や身体的制限、職業などの社会的属性に囚われないポジティブな他者理解や新たな関係性を、自ら発見したり生成したりしていた。また、学生同士など同じ社会的属性間においても同様の現象が確認された。そしてそのプロセスにおいて、参加者たちは「何かをしてあげた／してもらった」という意識はなく、「してあげる（贈与）／してもらったら何か返す（返礼）（モース：2009）」というような非対称的な関係性を感じることはなかった。それは、本ワークショップが花田春兆氏のいう「つぶやき ぼやき ささやき さけび うたい あそぼうよ」というコンセプトによるコラボ（合作・共同作業）を重視したものであったが故、「目的」や「意味」を重視する倫理ではない、パトスの表出としてのアート（荒井：2013）に専念できるものであったからだと考える。また本事例から、限られた文字数で自己表現が可能な俳句は、①社会的属性や身体的制限に囚われない関係性の構築に有用である、②ヒト・モノ・カネ・時間的にも負担が少なく実施しやすい、③「日常的な支援としてのボランティア」の実現を促す、自分事と他人事を無自覚に接続する機能を有することが示唆された。

【文献】

渥美公秀, 2015, 「災害ボランティアの新たな課題—「標準型」からの脱却と「見えにくい」被災者」への配慮」中村安秀・内海成治編『新ボランティア学のすすめ』 昭和堂.
荒井裕樹, 2013, 『生きていく絵——アートが人を〈癒す〉とき』 亜紀書房.
マルセル・モース, 2009, 『贈与論』 筑摩書房.